

# 幕末点描

糸島市人権・同和教育推進協議会広報委員 西原 茂徳

江戸時代末期、倒幕勢力の中心となったのは、薩摩藩と長州藩、そしてその両藩を結びつけた土佐の坂本龍馬でした。

## 菜の花事情

薩摩地方は古来、桜島の火山灰によって形成されたシラス台地が広く分布し、作物があまり育たない土地でした。そこに菜の花の栽培を広げたのは、薩摩で海運業を営んでいた仲覚兵衛という人物です。

ある時、商用で大阪の難波の港に立ち寄った覚兵衛は、1カ所だけ草花が茂っている場所を見つけます。雑草をかき分けてみると、そこに骨粉がありました。覚兵衛は、骨粉が植物の肥料になるのではないかと考え、早速持ち帰って使ってみたところ、見事に菜の花が育ちました。

覚兵衛は、全国一の皮革の町であった大阪の「ムラ」を訪ね、骨粉の取引を持ちかけます。当時、皮革の仕事は被差別身分の人々が担っていました。加工の際に発生する大量の骨粉の処理に困っていた「ムラ」の人々は、喜んでこの商談を受けます。

こうして栽培された菜の花の油（菜種油）は、当時の灯火の重要な燃料として全国に販売され、薩摩藩は多くの富を得ることになったのです。

## 長州藩の画期的な軍隊

長州藩では、吉田松陰の松下村塾で学んだ久坂玄瑞、入江九一、吉田稔麿、そして高杉晋作の4人が中心となって倒幕運動に立ち上がります。一度は外国との下関戦争によって壊滅的な打撃を受けた長州

藩でしたが、農民や町人など身分を問わない近代的軍隊をという高杉晋作の発案によって、奇兵隊が組織されました。

これに刺激を受ける形で、多くの隊が各地で組織されましたが、中でも吉田稔麿は、差別されていた人々による軍隊を作りました。この軍隊は、後に幕府軍を相手に最も勇敢に戦ったといわれています。

## 京都での坂本龍馬

当時対立していた薩摩藩と長州藩を結びつけたのは、土佐藩の坂本龍馬でした。彼は、1866（慶応2）年、京都で長州の桂小五郎と薩摩の西郷隆盛の会見を実現させ、それが一つの要因となって、薩長同盟が結ばれます。これが幕府の勢力を追い詰めていくことになるのです。

その坂本龍馬が京都で暮らしていたのが、当時差別されていた人々が暮らす「大仏前」と呼ばれる場所でした。全国各地から集まってきたいわゆる「無宿者」や、地方で食い詰めて職を求めてやってきた人、一旗揚げようとやってきた人、そして、

「勤王の志士」と呼ばれた浪人たち、そんな人たちが隠れ住むにも格好の場所だったのです。

実はここで坂本龍馬はお龍さんと出会います。お龍さんの父親は、長州藩の医者でしたが、亡くなった後、母親がこの大仏前で食事処を経営しながら暮らしていました。

龍馬と出会ったお龍さんが、その後勤めた旅籠が、あの寺田屋だったのです。

## エピソードから 見えてくるもの

こうして見ていくと、明治維新を生み出していった勢力を、経済的に人的に、あるいは精神的に支えたのが、差別されていた人々であったという見方もできるのでないでしょうか。

皆さんがよく知っている歴史の風景が、少し変わったと思いませんか。

